

真奈美、高1*16歳



- 大塚 恵美子 原案
- うちひさ マンガ
- 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 制作
- 2011年発行
- 無料配布

本書は、高校生の真奈美がさまざまな人と出会うなかで、葛藤しながら自分の声を獲得するまでに成長するマンガである。デートの費用は男の子が払うべきだと思い込んでいる隼人は、真奈美のアイスクリームの方も払う。真奈美は疑問に思うが、言葉にならない。また、女の子は料理が得意だと思い込んでいる隼人に、真奈美は料理が不得意であることを伝えることができない。

ストーリーはサッカー部の合宿先の浜辺で隼人が真奈美に強引にキスをしようとする場面で、クライマックスに達する。常に主導的にふるまう隼人に違和感を覚えながらも自分の気持ちを言葉にできずにいた真奈美は、ついに相手の意のままに従うことに抵抗の声を発する。

私たちは気づかないうちに「かわいい」「かっこいい」と称賛される「らしさ」の約束事に導かれて行動していることに、マンガの登場人物たちが気づかせてくれる。「自分の好きな自分」でいることよりも「あなたの好きな自分」でいることがよいと考える若者が、

私の周りにも多い。『真奈美、高1*16歳』は、自分の意思を持ち、主体的に生きることが大事だということを見せてくれる。

デート

デートは、親密な感情を抱く2人がコミュニケーションを楽しみながら、お互いを理解し、成長する機会でもある。しかし、日頃それほど女らしさ、男らしさを意識していないひとでも、デートになると性別役割にとらわれがちである。男らしくふるまわなければならないという役割意識は、時として相手の意思を無視したふるまいを起させ、暴力的な言動ともなる。女らしさの規範は従順であることをよしとし、女性の言動を抑制しがちである。「らしさ」にとらわれず自分の意思と言葉を持って他者とかわっていくことが、抑圧のない豊かな関係性を築くことにつながる。

しんたに はるか
新谷 遥香 (北九州市立大学地域創生学群地域福祉コース3年)



女、一生の働き方 — 貧乏ばあさん(BB)から働くハッピーばあさん(HB)へ



- 樋口 恵子 著
- 海竜社
- 2010年初版
- 1,500円(税別)

「BBからHBへ」は、鉛筆にらず、女性高齢者問題に健筆をふるう樋口さんの巧みなネーミングである。今や彼女の予言どおり、「老老介護」の超高齢社会に突入し、女性高齢単身者の半数以上が貧困にあえいでいる。本書は、彼女たちが働くハッピーなシニアとなるための、3方面からの処方せんである。

まずは女性70歳のハローワーク。たくましい生活力と豊富な経験、そして人的資源を活用した働き方が示される。人生後半の就労システムの確立で、BBをHBへと。

現役世代の女性には、人生100年の働き方を見すえた生き方として、働く女性の「人生すべり台三度笠」が示される。妊娠・出産、夫の転勤・転職、介護による離職というすべり台から落ちる前でも後でも、元のコースに復帰できるような笠(傘=政策)の確立で、BBをHBへと。

男性には、苦手な人間関係力と生活自立力を女性に学ぼうと呼びかける。男性の生涯を通したジェ

ンダー平等なライフプラン、ケアプラン確立で、BBをHBへと。

これらは、日本が豊かな価値を創造するための唯一最良の道であるという。続編には、生活自立力アップのため「dj(ダメなじいさん)からDJ(デキルじいさん)へ」を期待したい。

女性高齢単身者と貧困

女性の高齢単身者の貧困率は52.25%(2007年)と高い。理由は低い年金にある。男性と比べてその低さは国際的にもきわ立っているという。

厚生年金受給額の女性の平均は11万2000円で、男性の57%にすぎない。また基礎年金のみの受給者(平均4万9000円)は、女性が665万人で男性の3倍も多い。女性=専業主婦、が制度の前提となっているためである。

雇用での深刻な女性差別をはじめとして、社会のさまざまな慣行上の差別が、高齢期に年金の低さという点に集約されてくる。まさしく「すべての道はローバに通ず」である。

とみなが けいこ
富永 桂子 (福岡大学非常勤講師)



癒しとイヤラシ — エロスの文化人類学



- 田中 雅一 著
- 筑摩書房
- 2010年初版
- 1,600円(税別)

妖しくて、ユーモラスで、魅惑的なタイトルである。「イヤラシ」とはいわゆるフーズクやポルノグラフィーなど、猥褻とみなされている性民俗文化のことをいう。男性中心的で、女性を過剰に性的な存在として扱い、貶めているとの批判もある。本書もイヤラシの世界の大半は、支配/従属関係や性的搾取に満ち、反エロスのだと指摘する。

「反エロス」とはエロスを否定する立場で、快楽を与える者と与えられる者、すなわち能動と受動との関係が固定していて、与えられる側の能動性が発揮できないような状況をいう。たとえば女性は男性の性的能力に依存した受動的な存在とされる。著者は戦後から現代までの性をめぐるルポルタージュや医学書などから、反エロスのまなざしを抽出する。

しかし、本書の主眼はいわば逆転の発想で、イヤラシの世界におけるエロスを探ることなのだ。なかでもAV監督の代々木忠の作品は、性行為で男性が受動的な快楽に身を委ねていたり、女性が自立的に性的快楽を追求したり、性別という秩序すら

曖昧になる、「癒し」につながるエロスを描いているという。

豊かな性のあり方を模索するフェミニズムのポルノグラフィー研究の一端ともいえる。

ポルノグラフィー

性的欲望をつくりだし、刺激するために制作される表現物の総称。セクシュアリティを男女の二項対立の図式に回収してしまう点で、反エロスのである。フェミニズムは、ポルノグラフィーを性差別の一形態とし、女性に与える不快感や恐怖、性暴力を誘発する可能性などを議論してきた。他方、ポルノグラフィーを一概に否定するのではなく、性差別や暴力を描かない、女性が楽しめるポルノグラフィーを肯定的に取り扱おうとする試みもある。家父長制下で抑圧されてきた女性の性的な主体性や快楽を回復するためだ。現在、日本の女性向けポルノはマンガが主流である。

きのした なおこ
木下 直子 (九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程)



わたしのとくべつな場所



- バトリシア・マキサク 作
- ジェリー・ピンクニー 絵
- 藤原 宏之 訳
- 新日本出版社
- 2010年初版
- 1,500円(税別)

この絵本は、12歳の黒人の少女が、差別や危険にあいながら、公共図書館にたどり着くまでが描かれている。バスも公園も黒人の居場所が限られていた1950年代、公共図書館だけは、人種にも出身国にも関係なくすべての人を敬意を払って迎えてくれる場所だった。初めて1人で図書館に行く少女に、祖母は「図書館は自由への入り口。黒人だからといってどんなに差別されても、私たちの心までは、誰にも命令することはできない」と励まし送り出す。

たどり着いた図書館を前にして、毅然と胸を張る少女の見上げる目線の先に「Public Library: All Are Welcome」の文字が……。そう、すべての人が歓迎され、誰もが平等に、読書の喜びと情報がもらえる場所。それが図書館だ。黒人であるがゆえに閉ざされていた少女の可能性が開かれた一瞬だ。

図書館には世界にも過去にも通じる窓がある。少女にとって図書館は、世界を見渡せる自由の翼と、自分を肯定する根っこを得る大切な居場所に

なっていく。著者の子ども時代の体験をもとにつくられた絵本である。

図書館の自由に関する宣言

「図書館は、基本的人権の1つとして知る自由を持つ国民に、資料と施設を提供することを最も重要な任務とする」と謳った「図書館の自由に関する宣言」は、日本でも日本図書館協会が1954年に採択し、1979年に改訂決議された。資料収集、資料提供の自由はもちろんのこと、利用者の秘密が守られ、検閲されることもなく、すべての国民が人種、信条、性別などで差別されることなく安心して図書館利用ができる公平な権利を持つことが宣言され、多くの公共図書館の規範となる基本理念となっている。

くさがや けいこ
草谷 桂子 (児童文学作家)

